



日本「アジア英語」学会 ニューズレター

No. 4 (Feb. 1999)

第4回全国大会 豊橋技術科学大学で開催

第4回全国大会プログラム

大会テーマ：アジア英語研究の最前線(2)

日時：1998年12月19日(土)

10:00-17:30

会場：豊橋技術科学大学 A2 講義棟

大会総合司会 橋内 武(桃山学院大学)

9:30 受付

10:00 開会の辞：加藤三保子(豊橋技科大学)

会長挨拶：本名 信行(青山学院大学)

10:20-11:40

特別講演：「ことばと言語政策」

小野原 信善(香川大学)

11:40-12:00 会員総会

12:00-13:00 昼食休憩

有本 純(京都産業大学)・米岡ジュリ
(熊本学園大学)

4. "Fast Speech Rules in English"

Stephanus Djawanai(名古屋商科大学)

15:15-17:00 シンポジウム

テーマ：アジア英語研究の最前線(2)

司会：本名 信行(青山学院大学)

発題：

「アジア英語への対応と認識—日本と韓国の場合」 吉川 寛(中部大学)

「アジア英語のプラグマティクス研究の課題と展望」 多田昌夫(大阪国際女子大学)

"The Influence of English on the National Languages in EFL Countries: With Special Reference to Indonesia"

Eugenius Sadtono(名古屋商科大学)

閉会の辞：藤田 剛正(常葉学園大学)

17:30 懇親会(於：学生食堂)



〈加藤三保子大会実行委員長による開会の辞〉

13:00-15:00 研究発表

1. 「韓国英語教育の現状及び日本との比較」
梁瀬 正子(奈良佐保女学院短期大学)
2. 「カンボジアの英語教育事情」
浅川 和也(東海学園女子短期大学)
3. 「国際コミュニケーションと英語の変種」

大会をふりかえって

藤田 剛正(常葉学園大学)

「フィリピンは数え方によっては140もの土着語を有する多言語多文化社会である。日常生活では、各自は土着語を使って自己を表現している。しかしフィリピン人は場面によっては国語のフィリピン語も共通語の英語も、使うことができる。それぞれの言語には、場面によって。それによった方がよりよく自己を表現できるという面がある。フィリピン人は土着語・フィリピン語・英語を場面に対応して使い分けて自己のアイデンティティを主張している。」
以上は小野原信善氏による特別講演の核心部分である。かつて本名信行氏はノンネイティブ・スピーカー・イングリッシュの正当性を、話者がそれを使ってアイデンティティを主張しているという使用の実態においた(『アジアの英

語』p.10)。小野原氏はフィリピン社会における言語使用を広く観察して、フィリピン英語に関しては本名氏と同じ結論に達したのである。

今回の研究発表とシンポジウムでは焦点の一つが韓国英語に集まった。韓国では1997年、初等教育の第3学年から始める必修英語教育の実施段階に入ったが、その目標は「生活英語」の習得であり、日本の幼児英語教育に関して文部省などが目指している「国際理解教育」とは対照的である(梁瀬正子「韓国英語教育の現状及び日本との比較」)。次に、韓国中学校英語教育の教科書で扱っている話題を調べてみると、英語母語国文化や外国文化からの取材は少なく、儒教倫理を中心とする自国文化からの取材が主である(吉川寛「アジア英語への対応と認識—日本と韓国の場合」)。こうした調査結果から見ると、韓国では従来型の受信・受容・同化の方向に向かう英語教育から転換して、積極的な発信と自己主張をめざす英語教育の方向に向かっていることがわかる。もともとことばはそれを使って自己の文化を発信し、自己のアイデンティティを主張することが第一の用途であるから、韓国の英語教育は言語教育本来の方向を向いているのである。

有本純・米岡ジュリ「国際コミュニケーションと英語の変種」は、英語変種の調査研究が日本にいながらにして実践可能であることを示す好例である。有本氏と米岡氏は日本社会の国際化を利用して、ネイティブとノンネイティブの英語変種24種を面接方法で採集・録音して、それぞれの特性を分析した。今回の研究発表では韓国英語のサンプルを聞いたがたいへん興味深かった。

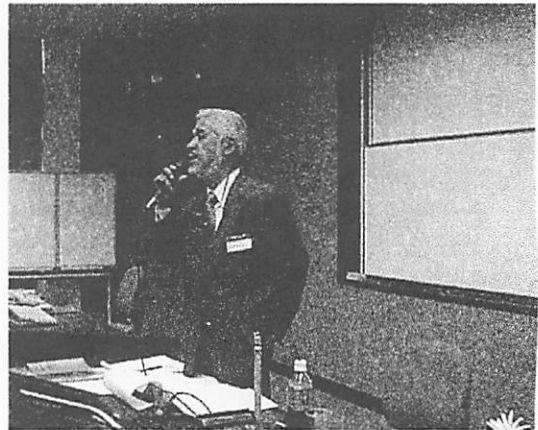
大会の会長挨拶で本名氏は、「アジア英語」はわれわれの英語であり、われわれには担う責任と任務があると述べたが、浅川和也「カンボジアの英語教育事情—NGOによる教育開発協力の事例から」は、まさにその任務をカンボジアでになったことの報告であった。浅川氏はNGOの「国際理解教育センター」より派遣されて、教員不足のカンボジアで英語教育に携わった。英語はネイティブ・スピーカーであるとノンネイティブ・スピーカーであるを問わず、これを使用する者すべての所有であるから、われわれもこれを一層豊かに育てる責務を負っているのである。

小野原信善氏特別講演

「言葉と言語政策」について

橋内 武(桃山学院大学)

『フィリピンの言語政策と英語』(窓映社、1998)を上梓して間もない小野原信善氏(香川大学)に上記の題で講演をしていただいた。氏は講演題目に捕らわれることなく、言語の多様性に対する考え方を次のように披瀝した。第1に、英語帝国主義と国際英語論と多文化主義・多言語主義について、近年盛んになったこれらの議論が全てアイデンティティの(無視・重視・保護)の問題にかかわるとした上で、以下の本論に入った。



＜小野原信善氏による特別講演＞

第2に、言語とアイデンティティについて。フィリピンのような多言語社会では、「人は必ずしも一つの言語を通してアイデンティティのよりどころを求めて行動するわけではない。」言語の雑種化(またはクレオール化)により、アイデンティティの捉え方も融通無碍となる。アジア・アフリカの作家が、各自の部族語・地域語にこだわることなく、英語で作品を発表するのは、その査証であろう。

第3に、Englishesの正当性について。英語には、アメリカ英語・イギリス英語だけでなく、日本英語やフィリピン英語など種々の英語がある。英語は個々の文化とのかかわり具合が深いゆえに、その文化自体(例、日本文化)を深く知ることがなければ理解できない表現(例、His stomach is black.)から、人類共通の基本的経験から了解し得る表現(例、My head is painful.)に至るまで幅広い。近年の認知言語

- 学の成果から、人間の身体的特徴が生み出す
- (1) 運動感覚的イメージ・スキーマ (例、Open the radio. Close the light.)
 - (2) 基本レベルでの知覚 (例、You are my right arm.)

を適応して、新英語 (New Englishes) の正当性・妥当性を証明しようとした。

このような論は、従来の社会言語学や形式意味論にはかけていたパースペクティブを提供する。

肝心の「言語政策」の方は黒子となって消えていったが、言語の雑種化に基づくアイデンティティー論と認知意味論的な立場からの Englishes 論には示唆に富むものがあつた。

なお、小野原氏は 1999 年 7 月から 1 年間、アメリカとフィリピンで研究生活を送るとのこと、さらなる研究成果が期待される。

新 刊 案 内

『フィリピンの言語政策と英語』

小野原信善著 窓映社 1998 年

榎木蘭鉄也 (神戸市立工業高専)

聞くところによると、香川大学で英語学を教えておられる著者の小野原氏は、もともと法学部出身であるという。小野原氏が言語「政策」に関心を持ったのも、法学のような社会科学を学んだ経験と関係があるのかも知れない。

本書は、著者のここ数年、研究対象にしているフィリピンの言語政策を緻密かつ網羅的に紹介・分析した日本に類例のない力作である。

本書の内容は、「フィリピンの言語政策」についての第 1 部と、「フィリピンの英語」についての第 2 部の 2 部に大きく分けられている。各部の章の題目が、本書の内容をかなり反映しているため、次に各章の題目を列記する。

第 1 部「フィリピンの言語政策」は、「フィリピンの言語事情」、「言語使用の実態—言語調査が示すもの」、「言語転移」、「バイリンガリズム展望」、「言語政策の動向 I—1974 年バイリンガル教育政策まで」、「言語政策の動向 II—1974 年以降」、「回顧と展望」の 7 章からなり、フィリピンの言語政策一般の紹介や、フィリピンの言語の社会言語学的分析がされている。

第 2 部「フィリピンの英語」は、「英語導入

の歴史的背景」、「フィリピン英語の位置づけ」、「フィリピン英語の特徴」、「フィリピン英語文学」、「英語教育」の 5 章からなり、フィリピン英語を多方面から紹介・分析している。

そして巻末には、「フィリピン言語政策年表」、「フィリピン土着語実勢図」、「フィリピン図」の後に、「注」と「参考文献」が続く。本書を通読して、驚かされることは、非常に豊富な資料を用いていることと、それらの資料を緻密に分析していることである。

私は、インドの英語の研究をしているのだが、いつも痛感することがある。それは、欧米のような資料が手に入りやすい「便利」な国の研究と違い、アジアの国や地域は、一般に研究資料などの情報収集が非常に「不便」であるということである。特に、その国や地域の英語・言語使用・言語政策などに関する資料には、包括的・網羅的な研究が少ない上に、入手がすこぶる困難なことが多い。幸い、フィリピンでは英語が第 2 言語であるので、英語で書かれた資料が比較的豊富なため、英語での資料が乏しい地域の研究よりは資料集めが楽であったかも知れない。しかし、情報収集が「便利」な国や地域の資料を収集することに比べると、その困難さは容易に想像できる。

ともかく、本書の巻末の参考文献一覧にあるだけの資料を収集するのは、容易ではなかったであろう。資料収集の労力もさることながら、著者は地道に、根気強く、そして緻密に収集した資料を分析している。本書を読んでいると、著者の言語政策研究への情熱と熱意が伝わってくるようである。

会員による新刊図書

『英訳 江戸川柳 一俳風柳多留』
アラン・クロケット監修 撫尾清明訳
葉文館出版 1998 年

訳者の撫尾清明 (うつお きよあき) 氏は、九州龍谷短期大学教授。本の帯に、「私たちは、今まで外国で陽の当たらなかつた日本の詩歌を紹介してくれた撫尾教授に感謝したい」というドナルド・キーン氏によるコメントがあります。

事務局から

12月19日(土)の第4回全国大会(会場、豊橋技術科学大学)で会員総会が行われ、次の議題についての報告がありました。

1. 紀要について

学会紀要『アジア英語研究』(英文名称: *Asian English Studies*)の審査と査読が現在おこなわれております。第5回大会のときには配布できるようにする予定です。

2. 第5回大会について

第5回全国大会は、1999年6月26日(土)に清泉女子大学(東京都品川区東五反田)で行います。第5回大会のテーマは、"The Impact of English in China"の予定です。基調講演、特別シンポジウム、基調講演者とのパネルなどを計画しております。

3. 事務局のE-mail変更について

事務局のE-mailアドレスを、

tina2@gol.com

に変更いたしました。以前のE-mailアドレスもしばらく有効ですが、手違いなどを少なくするために、極力、新しい方でご連絡下さい。

他学会からのお知らせ

発表論文および参加者を募集

International Association for Intercultural Studiesが、1999年7月28日から31日まで、アメリカKentucky州のUniversity of Louisvilleで国際会議(7th International Conference on Cross-cultural Communication)を開催いたします。

お問い合わせは:

Dr. Robert N. St. Clair,
Department of English
University of Louisville,
Louisville, KY 40192, USA
E-Mail:

rnstcl01@athena.louisville.edu

Or

RNSTCLR@msn.com

FAX: 502-852-4182,

Telephone: 502-852-6801

第5回全国大会

研究発表募集

第5回全国大会は、1999年6月26日(土)に清泉女子大学(東京都品川区東五反田)で行います。

第5回大会のテーマは、

"The Impact of English in China"の予定です。第5回大会の研究発表は、特に、「中国での英語状況」あるいは「英語と中国語の相互作用」に関する発表を歓迎します。

研究発表を希望する会員は、4月30日(金)(必着)までに、要旨(日英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて、事務局まで郵送して下さい。

<編集後記>

本号からニューズレターの編集人が変わりました。WordでDTPの作業をしているのですが、なにぶん慣れないため、前号に比べて、本号の内容は少し寂しくなっていました。今後は、努力して、もっと内容を充実させたいと思います。

それから、これから、学会ニューズレターを会員の方々にもっと活用していただきたいと考えています。ニューズレターへの要望、エッセイなどの投稿、会員による著書・論文の紹介や書評なども掲載していこうと思っています(アジアの英語や言語に関する投稿を優先しますが、アジア諸国での現地体験記なども歓迎します)。ニューズレターへの投稿は、E-mail、FAX、郵便で事務局までお願いいたします(編集の都合上、E-mailが一番ありがたいです)。

1998年2月1日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 榎木蘭鉄也

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525

東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学

田嶋宏子研究室内

TEL: 03-3326-5050(代)

FAX: 03-3326-4550

E-mail: tina2@gol.com